秘境ホロホロ山麓の湿原

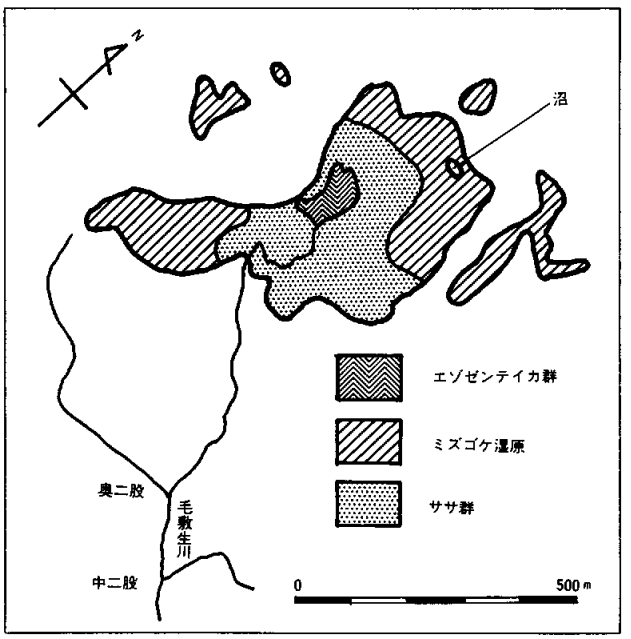
――「幻の沼」調査結果――

白老山岳会

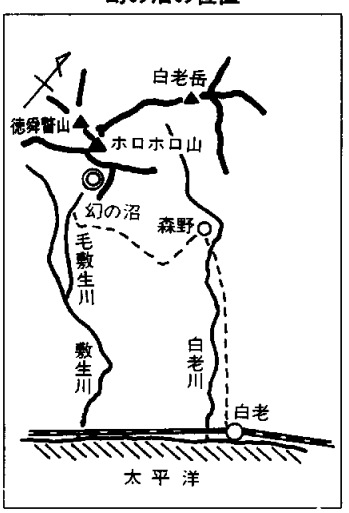
国土地理院発行の五万分の一地形図「徳舜瞥山」から、ホロホロ山（一三二二m）の南東山麓に湿原と思われる大きな平地が読みとれる。アイヌの古老の話では、満々と水をたたえた大きな沼があるという。地元の白老営林署に尋ねてみると、職員で行ったことのある人は誰もいない。

この湿原と推定される一帯を「幻の沼」と呼んで、白老山岳会では昨年二回にわたり、調査を実施した。最初の調査は、古老の話にある大きな沼を確認するため計画されたもので、メンバーは女性一人を含む会員七名、隣り町の登別山岳会員ら三名、新

湿原の植生概念図



幻の沼の位置



湿原の全容

中央部右手の山がホロホロ山の南峰

（菅小牧民報社　提供）

聞記者二名の計十二名で、一九八二年七月四日に行った。

二度目の調査は近郊山岳地調査の一環として、湿原を通りホロホロ山へと続く登山道を検討するために会員四名で、同十一月七日に実施した。

□……

「幻の沼」を求めて

……□

白老の市街地から道道白老大滝線を十二kmほど入った森野小中学校前より道道を離れ、国有林林道をさらに十kmほど進み、毛敷生橋手前で下車する。

ここから毛敷生川に降り、上流へ向かう。一m前後の転石がゴロゴロしており、勾配は急で水量もあり、沢登りの雰囲気は十分である。だんだんとV字状に深く切り立ってきて、三〇分ほどで第一の滝（高さ二m）に出会い、すぐ上で、高さ十二mの第二の滝が現われる。滝は幅三mの白い帯となって滝壺に落ちており、みごとな眺めである。右岸を巻き、さらに平凡な遡行を一時間ほど続けると最初の二股に達する。

右の沢に入り、小滝、滑滝を越え、沢の勾配は次第に急となる。二股から二〇分ほどのところで水が枯れ、枯沢を三〇分ほど遡ると、中二股に着く。

左の沢にコースをとり、巨大な溶岩塊を積み上げたような細い沢を登っていくと、奥二股に着く。ササの生い茂る右の沢を進むとまもなく広大な平地に出る。遡行開始から約三時間で、いよいよ「幻の沼」である。

□……

「幻の沼」発見

……□

「幻の沼」はホロホロ山の南東約三km、標高八五〇mのところに位置する。その成因は地質図幅説明書によると、新第三紀鮮新世（約五〇〇～一八〇万年前）のホロホロ火山活動で出来た爆裂火口のひとつである。ホロホロ火山の爆裂火口地形は、特に著しいものが九ヵ所数えられ、いずれも大規模で径一・六～〇・七kmにおよぶ。

「幻の沼」は、説明書では大谷地と呼ばれ、底部が径約〇・五kmの湿地帯とされており、近くにある周囲八五〇mの清水沼とともに摺鉢形の地形がよく残っている。

しかし、清水沼が豊かに水を貯えているのに対し、「幻の沼」は既に水はなく、広大な高層湿原となっている。北東から南西方向の延長は七〇〇mにも及び、その幅は広い所で四五〇m、狭いところで一〇〇mのヒラメに似た形をしており、面積は約十五ha、周囲は約二kmである。また、周辺には三ヵ所に、二八〇m×六〇m、八〇m×六〇m、八〇m×一二〇mの小さな湿原が点在している。

湿原の北端には、まさしく「幻の沼」が存在した。その大きさは二〇m×十五m、水深〇・五mの小さな沼だが、広い湿原の中のただ一つの沼というのは神秘的な感じがする。

湿原の中には幾条かの細い水路が蛇行して奥二股に結ばれている。また、人為的に掘られたと思われる穴（縦一m×横一mの正方形状）が数ヵ所みられた。後日、洞爺丸台風後現地の造材をしたという方に聞いたところ、当時その穴は既にあり、湿原の周辺にも相当数あって作業中穴に落ちたという。多分資源探査か何かの調査で掘ったと思われるが、詳しいことは分らない。

□……

乾燥化進む湿原

……□

造材関係者の話では、湿原の周辺はかつてアカエゾマツとダケカンバの豊かな混交林であったが、昭和二十九年の洞爺丸台風で大規模な風倒被害が発生し、その後数年にわたり直径六〇cm前後のアカエゾマツが三千石ほど搬出されたという。

当時搬出に利用された馬車の轍とみられる二条の跡が、湿原の西南にいまでも残っている。したがって湿原の周辺は現在ダケ

カンバが主体で、風倒を免れたアカエゾマツがわずかに残っているだけである。

湿原の植生は、第一回の調査に同行された登別の宗広光明氏（室蘭東園小教諭）の調査によると、エゾゼンテイカ群、ミズゴケ湿原、ササ群からなる。

群落を構成する主な植物としては、エゾゼンテイカ群では、エゾゼンテイカ、ナガバキタアザミ、カラマツソウ、タチギボウシ、ハンゴンソウ、アゼスゲなどである。

ミズゴケ湿原では、ミズゴケ属のほかチングルマ、ヒメイチゲ、ネバリノギラン、ワタスゲ、ミズバショウ、ツルコケモモ、イヌスギナ、サワギキョウ、ハクサンチドリ、コツマトリソウなどである。

ササ群では、ササ属のほか、ミネヤナギ、トクサ、ギョウジャニンニク、ヤマハンノキ、ハイイヌツゲ、バイケイソウ、アカエゾマツなどである。

また、沼にはミツガシワ、エゾノヒツジグサなど水生植物がみられた。同定については、宗広氏が行ったほか、一部の標本について文化女子大学室蘭短期大学の原松次教授に目を通していただいた。

第一回調査の七月四日には、次の花が目についた。

エゾゼンテイカはつぼみがふくらんでおり、まもなく開花という状態であった。

ミズゴケ湿原では、ワタスゲが特徴ある白いワタボウシの姿を一面に見せており、コツマトリソウがかれんな白い花を咲かせていた。チングルマは栄養がよくないせいか貧弱な小株で、数もそう多くなく、開花期の終わりで花が見られたのは数株だけだった。

ササ群落では、カラマツソウが花を咲かせており、湿原の北端には低木ながら見事な紫紅色のアカエゾマツの雌花が見られた。

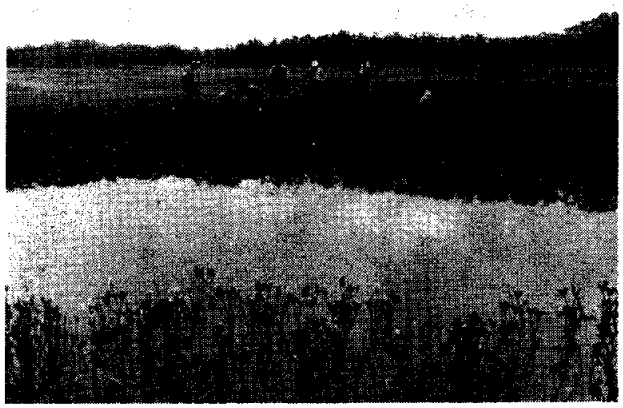
沼では、中心部を除き環状に群生しているミツガシワが白い花をつけていた。

第二回調査の十一月七日は晩秋のどんより曇った寒い日のせいか、「幻の沼」は荒涼とした原野と化し、最初の調査時のおだやかな表情とは別の厳しい顔を見せていた。七月には群落の境は不鮮明だったが、この時はササ群落は緑、ミズゴケ湿原、エゾゼンテイカ群落は茶褐色と明確に判別できた。

植物の種類は、そう豊富なものではなく、特にスゲが少ない。近くのホロホロ山、徳舜瞥山、オロフレ山などの高山や低湿原と共通するものが多いようであるが、詳細は今後の専門的な調査に期待したい。

湿原の入口で全面がササ原ではないかと思われたほど、ササが湿原を取りまいている。特に中央部への進入が著るしく、乾燥化が進んでいることがうかがえる。残念ながら、湿原の運命もそう長くないかもしれない。

湿原の中にわずかに小さなアカエゾマツが残っているが、その盗掘跡が多数あり、二回の調査時とも新しい跡が確認された。盗掘は相当長期にわたって行われているらしく、掘って捨てられた高さ一m前後の枯木があちこちで見られた。早急に有効な防止策が望まれる。



湿原北端の沼　7月4日の調査時はミツガシワの花が咲いていた　〔苫小牧民報社 提供〕

□……

山男の夢はふくらむ

……□

「幻の沼」は過去の資源探査と風倒木搬出の数年間を除き、いまでも一部の盗掘者のほかは、まったく人が近寄ることもない秘境である。また、いままで植物や地形などの専門的な調査が行われていない点や、北海道中南部では有数の規模と思われることから学術的にも興味深い湿原である。

この湿原にはまだ正式な名称はついていないが、白老山岳会の中ではホロホロ山の麓に位置するところから、ホロホロ湿原と呼んでいる。ホロホロ山の語源は不明であるが、ホロホロ湿原とは何か夢のある名前ではないだろうか。

いまのところホロホロ山、白老岳などの山には、白老側からの登山道がないため、これらの山の登山道設置を関係機関に働きかけているところである。この秘境が、毛敷生川～ホロホロ湿原～ホロホロ山～徳舜瞥山～大滝と登山道で結ぶことができたら、道内でも屈指の変化に富んだ素晴らしい登山コースとなることであろう。

（文責・辻　昌秀）